

* * *

次号の特集予告

287 巻 10 号(2023 年 12 月 9 日発行)

補体 revisited——抗補体療法はどこまで進んだか？

企画：堀内孝彦(地方独立行政法人福岡市立病院機構福岡市民病院)

- ・補体には感染防御に働く液性因子としての役割のほか，凝固系の活性化，免疫細胞の増殖や活性化，上皮細胞，神経細胞や骨などの臓器形成，組織の再生など“多面的”な機能を有することが明らかになってきた。
- ・補体の過剰な活性化は，自己免疫疾患，腎炎，心筋梗塞や脳梗塞などでの虚血再灌流障害，神経変性疾患，移植片対宿主病(GVHD)から COVID-19 重症化に至るまで，さまざまな炎症性疾患に関わることが推測される。
- ・2000 年代には遺伝子工学的に作製された抗体による分子標的療法が可能になり，2007 年にエクリズマブが first-in-class の抗補体薬として登場した。本特集では，“補体の魅力と抗補体薬のすべて”を届けられるよう，第一人者の先生方に執筆いただく。